

マラリアは原虫を媒介するハマダラ蚊に刺されることで感染し、時には死に至ることも。しかし、早期の発見、治療で治る可能性も高い。にもかかわらず、10年前のミャンマーでは、年間5000人ほどが命を落としていた。「当時、遠隔地に点在する保健センターを回ってみると、検査キットや治療薬が行き渡っておらず、診断も治療もできないことも多かったのだ

### 治療から予防へー 新たな戦略を見いだす

そして、10年にわたりマラリア対策を支援してきたのが中村正聡さんだ。それまでも、インドネシアやフィリピンでマラリア対策の改善に奮闘してきた中村さん。「大学時代は、学校にもろくに行かず山岳部で山登りに没頭しました。ターゲットを決め、どのルートで行くか、どんな資機材を確保するか、非常時にどう対応するか…。マラリア対策と登山は似ているなと感じます」。

出すことに。しかし、資金があっても、それを動かし対策を立てる能力を持つ人材がいなければ何も動かない。そこで手を差し延べたのが日本。結核に対してはDOTS※治療の普及を、HIV／エイズに対しては血液検査の技術向上といった支援を日本人専門家が現場に入り、続けてきた。

マラリア、HIV／エイズ、結核の三大感染症は、ミャンマーの死因の上位に入る。しかし、軍事政権下のミャンマーは経済制裁を受け、国の予算が限られ、感染症対策が後回しにされていた。人々は市販の薬や無免許の医師に頼るしかなかったのだ。

そこに転機が訪れた。2005年、「世界エイズ・結核・マラリア対策基金（世界基金）」などの支援を得て、ミャンマー政府はマラリア対策の強化に本格的に乗り

### 少しずつ実を結んできた マラリア対策

のしつ、のしつとゾウが進む。周りはうっそうとした森林。「こういう場所の交通手段には、ゾウが一番だよ」とミャンマーの人々は言う。大きな背中にくりくり付けられているのは、マラリアの治療薬、検査キット、蚊帳だ。

ミャンマー中央部に位置するバゴー山地。カレン族の村に到着すると、みんなが広場に集まってきた。医師や助産師などの県の保健スタッフが、マラリアの流行状況を調べにやってきたのだ。一人一人検査し、陽性だったら薬を処方する。また、各家庭に蚊帳を配るのも彼らの仕事。こうした遠隔地でマラリア対策が行われるようになったのは、つい最近のことだという。

少数民族のカレン族が暮らす村でマラリア検査を実施。遠隔地まで少しずつ保健医療サービスが広がってきた



す」と中村さんは振り返る。これを变えようと保健省の職員と共に取り組んだのが、薬や検査キットなどを効率的に分配する「サプライチェーン」の仕組みづくり。地域によって患者の数にばらつきがあるため、すべての保健センターに同量の薬を配布するのではなく、各センターのスタッフが月に一回、県の保健局に集結。前月に使った薬や検査キットの数を申告し、使った分だけをその場で受け取り、補充する。これで各センターに常に一定量が確保され、在庫を切らすことなく治療できるといふわけだ。サプライチェーンが全国に拡大したことで、マラリアの死亡者数は10年前の約10分の1にまで減少した。

そして今、マラリア対策は岐路に立っている。「タイ・カンボジア国境付近で治療薬が効かないマラリアが発生し、ミャンマー国内でも発見されています。さらに世界中に広がらないよう封じ込めなければ」と中村さんは決意を語る。感染のリスクが高いのは、蚊が多い山地に暮らす住民に加え、金鉱山、チーク材のプランテーション、ゴム農園、ダムなどで働く出稼ぎ労働者たち。彼らは定住せず、また別の場所へ移動してしまうため、そのマラリアが広がってしまう可能性が高い。

予防には、一般的に蚊帳が効果



遠隔地では、村の人々から募った保健ボランティアが在庫管理を担当し、使った分の薬が分配される

的。しかし、野宿をして暮らす彼らには無用の長物になってしまふ。そこで中村さんは保健省の職員と共に、仕事内容や住居環境などの患者データの収集に取り組みでいる。彼らの生活スタイルを踏まえて、より効果的な対策を見つけるためだ。

ミャンマーの人々と、同じ釜の飯を食べながら、最善の対策をつくり上げていく。それが中村さんの信念だ。

※Directly Observed Treatment, Short-courseの略で、患者の服薬を直接確認する仕組みなどを取り入れた治療法。



「マラリアは人間がつくりだす病気なのです」と話す中村さん(右端)。建築現場など、土が掘られた場所に水がたまって蚊が発生する

## 創造力でマラリアを食い止める

軍事政権時代から、地方を中心に感染症対策が遅れていたミャンマー。10年にわたり、この国のマラリア対策を支え続ける日本人専門家が、現地の人々と共に新たな課題に立ち向かう。



マラリア流行地はこうした山の中。蚊帳や薬などを運ぶ時には、森林局のゾウが大活躍



保健医療サービスが届かない地域では市場で売られている薬を購入。効能を正しく理解していない人も多い

